

中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第七回 倭寇と遣明使

前回のふりかえり

アジアからヨーロッパに至る巨大帝国を築いたモンゴル。中国から漢民族王朝が消え去る中、日本はモンゴル軍の二度にわたる遠征を退ける。しかしモンゴルは当初から日本遠征を計画していたわけではなかった。外交交渉による関係構築を模索し、再三にわたり使節を派遣していた。

また、日本を勝利に導いたのも鎌倉武士の奮闘や暴風雨による天祐だけではなかった。その背景には朝鮮半島やベトナムの人々のモンゴルに対する果敢な抵抗運動があったのである。

0			
100	後漢 25-220		
200	魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
300	晋 265-316		
400	五胡十六国時代	東晋 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1200	元 1271-1368		
1300			
1400	明 1368-1644		
1500			
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900	中華民國 1912-1949		
2000	中華人民共和國 1949-		



二度にわたる元寇が行われた元朝の時代、日中間の民間交流はどうなったのか？

① 国家間の対立とは関係なく、民間交流は行われていた

② 緊張が続いていたため、民間交流は行われなくなってしまった



民間交流の最盛期

元朝の時代、日本は元からの使節を処刑するなど外交交渉を拒否していたが、元は元寇のさなかにも日本との貿易を認めるなど寛容な政策をとっていた。

その結果、禅僧の往来や寺社造営料唐船の派遣など、両国間の民間交流は最盛期を迎えていた。

鎌倉・建長寺の山門



1274年 10月、元の軍隊が対馬、筑前に来襲（文永の役）

75年 4月、杜世忠ら元の使節団が長門室津に来訪 9月、鎌倉で斬首される

76年 1月、元が南宋の都・臨安を攻略、宋帝を大都へ

77年 6月、南宋に渡った日本商船が交易を止めて帰国

78年 11月、元が日本商船の交易を許す

79年 2月、元が南宋を滅ぼす 7月、周福ら元の使節団が筑紫に来訪 博多で斬首される

81年 5月、高麗軍が対馬に来襲 6月、元軍が高麗軍と合流し、志賀島、長門に来襲（弘安の役）

1304年 称名寺造営料唐船を元に派遣

15年? 火災で焼失した極楽寺再建のため、極楽寺造営料唐船を元に派遣

23年? 火災で焼失した東福寺再建のため、東福寺造営料唐船を元に派遣 (?)

25年 火災で焼失した鎌倉の勝長寿院・建長寺再建のため、建長寺造営料唐船を元に派遣

29年? 関東大仏造営料唐船を元に派遣

32年 住吉神社造営料唐船を元に派遣

42年 足利尊氏が天龍寺創建のため、天龍寺造営料唐船を元に派遣

68年 朱元璋（洪武帝）が元朝を北へ逐い、明朝を建国

74年 明朝が民間貿易を全面的に禁止し、朝貢貿易に一本化（海禁＝朝貢体制）

韓国で発見された日元貿易船

一九七六年、韓国の新安で元代に沈没した貿易船が発見された。

この貿易船は、一三一九年に焼失した京都の禅寺・東福寺の再建のために派遣された寺社造営料唐船と考えられ、船内からは大量の陶磁器や銅銭、香辛料や薬草が発見された。

京都東福寺の山門(国宝)

1274年 10月、元の軍隊が対馬、筑前に来襲（文永の役）

75年 4月、杜世忠ら元の使節団が長門室津に来訪 9月、鎌倉で斬首される

76年 1月、元が南宋の都・臨安を攻略、宋帝を大都へ

77年 6月、南宋に渡った日本商船が交易を止めて帰国

78年 11月、元が日本商船の交易を許す

79年 2月、元が南宋を滅ぼす 7月、周福ら元の使節団が筑紫に来訪 博多で斬首される

81年 5月、高麗軍が対馬に来襲 6月、元軍が高麗軍と合流し、志賀島、長門に来襲（弘安の役）

1304年 称名寺造営料唐船を元に派遣

15年? 火災で焼失した極楽寺再建のため、極楽寺造営料唐船を元に派遣

23年? 火災で焼失した東福寺再建のため、東福寺造営料唐船を元に派遣 (?)

25年 火災で焼失した鎌倉の勝長寿院・建長寺再建のため、建長寺造営料唐船を元に派遣

29年? 関東大仏造営料唐船を元に派遣

32年 住吉神社造営料唐船を元に派遣

42年 足利尊氏が天龍寺創建のため、天龍寺造営料唐船を元に派遣

68年 朱元璋（洪武帝）が元朝を北へ逐い、明朝を建国

74年 明朝が民間貿易を全面的に禁止し、朝貢貿易に一本化（海禁＝朝貢体制）

0	後漢 25-220		
100			
200	魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
300	晋 265-316		
400	五胡十六国時代		東晋 317-420
500	北朝 439-589		南朝 420-589
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800			
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900			
2000	中華民國 1912-1949 中華人民共和國 1949-		





対日イメージの悪化

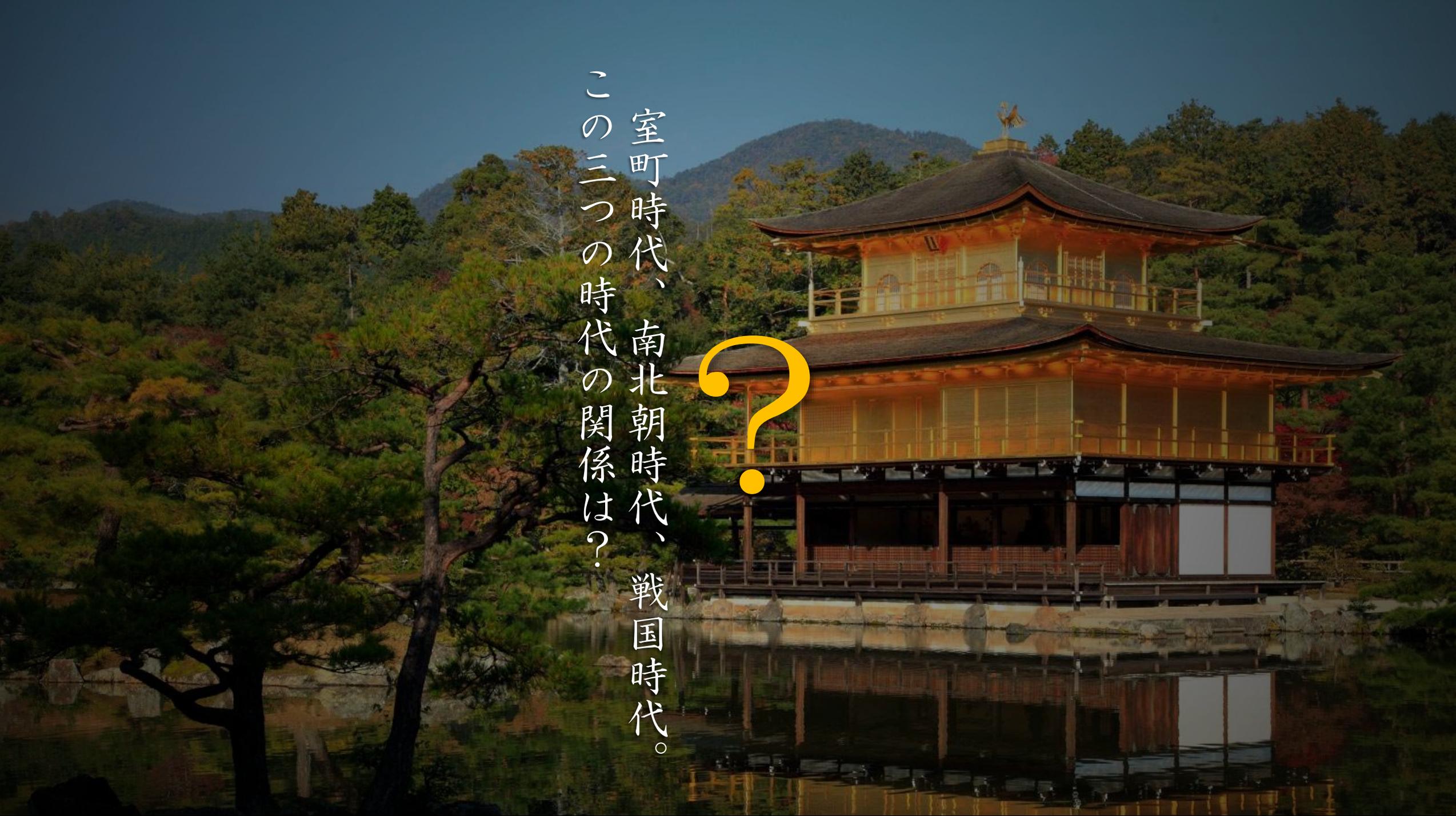
〔解説〕

東アジアの人々の対日イメージは、古代から中世の鎌倉時代に至るまできわめて良好なものであった。

ところが室町時代以降になると、そのイメージは大きく変化する。暴虐非道といったネガティブなイメージが作られていくのである。

では、なぜこうした変化が起こったのか。今回の講義では、その原因となった倭寇とその背景について考えてみたい。

室町時代、南北朝時代、戦国時代。
この三つの時代の関係は？



0	後漢 206BC~220AD		
100			
200	魏 220~265	蜀 221~263	吳 222~280
300	晉 265-316		
400	五胡十六国時代	東晉 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800			
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400	明 1368-1644		
1500			
1600	清 1616-1912		
1700			
1800			
1900	中華民國 1912-1949		
2000	中華人民共和國 1949-		



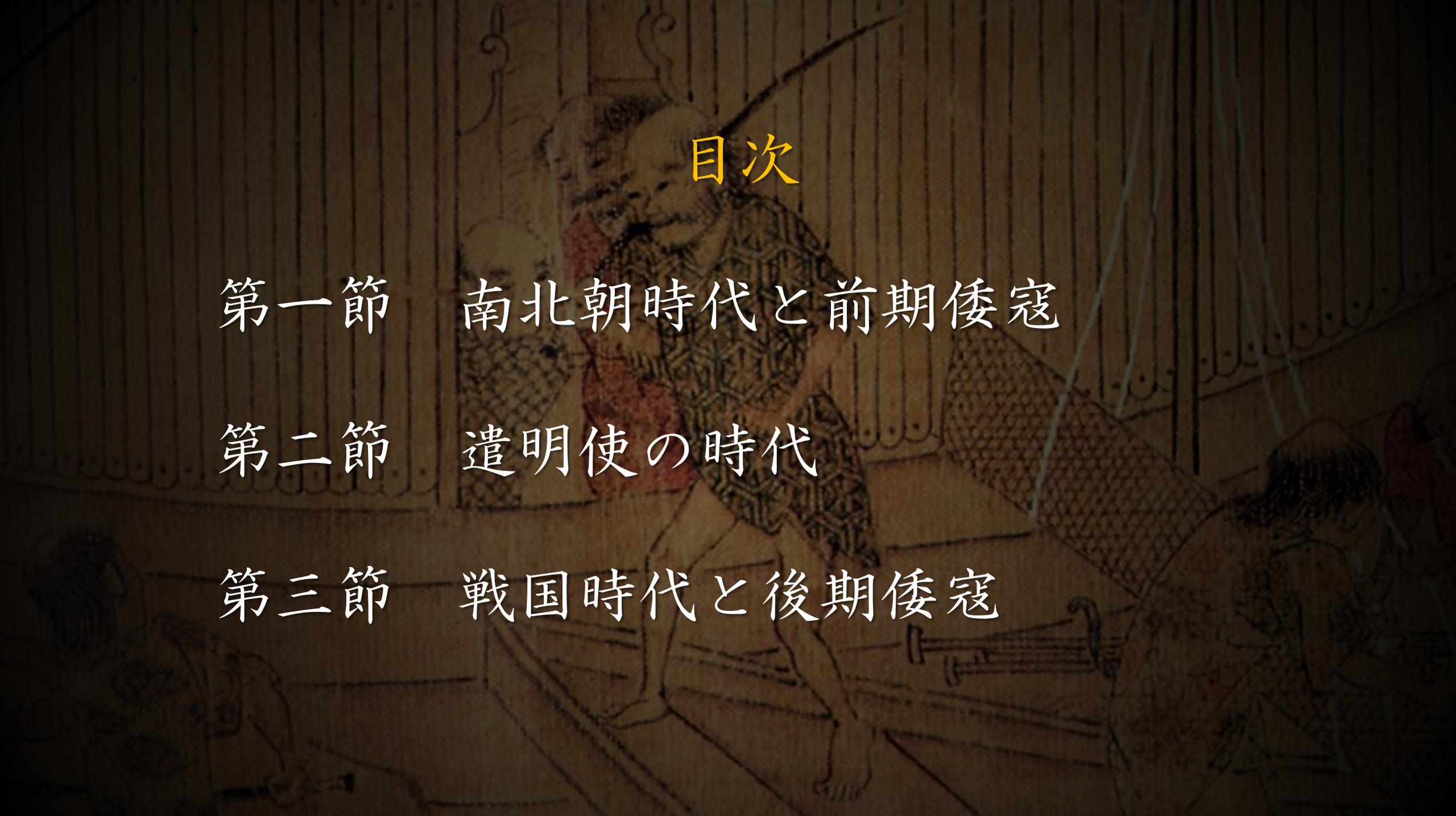
0	彌生時代 紀元前?世紀~3世紀	
100		
200		
300		
400	古墳時代 4世紀末~?	
500		
600	飛鳥時代 6世紀末~710	
700	奈良時代 710~794	
800		
900		
1000	平安時代 794~1192	
1100		
1200	鎌倉時代 1192~1333	
1300		
1400	室町時代	南北朝時代 1336-92
1500	1336~1573	戰国時代 1467-1573
1600	安土桃山時代 1573~1603	
1700	江戸時代 1603~1868	
1800		
1900	近代 1868~1945	
2000	現代 1945~現在	

南北朝の内戦に始まった室町時代。激戦地の一つとなった九州とその近辺の島々では、戦乱による食料や労働力の不足を補うため、武装集団が朝鮮半島や中国の沿海部を襲い、略奪や拉致を行っていた。(前期倭寇)

一三六八年、モンゴルを駆逐し、漢民族の王朝を復興した明は、日本に倭寇の取り締まりを求めるとともに、民間貿易を禁止し、朝貢貿易への一本化を進めた。(勘合貿易)

一三九二年、南北朝を合一し、六十年におよぶ内戦に終止符を打った室町幕府は、倭寇の取り締まりを強化し、一四〇一年、遣唐使廃止以来五百年ぶりに使節を派遣し、明の朝貢貿易体制に加わった。(遣明使)。

一四六七年、応仁の乱により幕府の力が衰え、やがて戦国時代を迎えると、多国籍化した武装集団が再び日本を拠点に大規模な密貿易と略奪や拉致を再開した。(後期倭寇)



目次

第一節 南北朝時代と前期倭寇

第二節 遣明使の時代

第三節 戦国時代と後期倭寇



第一節 南北朝時代と前期倭寇

建武の新政と南北朝の内戦

〔解説〕

一三三三年、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は、中国の皇帝専制に倣って天皇による親政をめざした。

しかし、皇帝専制を支える科挙制度による文官優位の体制が築かれていなかったため、足利尊氏ら武家勢力を統制することができず、その後日本はおよそ六十年間にわたる内戦の時代を迎えた。南北朝時代である。



重要文化財「絹本著色後醍醐天皇御像」

(神奈川県藤沢市遊行寺(ゆきまうじ)蔵)

中国大陸

朝鮮半島

日本列島

東アジアの科挙制度と文官統制

後漢
25-220

弥生時代



「絹本著色後醍醐天皇御像」
神奈川県藤沢市遊行寺(ゆぎようじ)蔵

〔解説〕

図は後醍醐天皇が鎌倉幕府討伐の成功を祈る姿を描いた肖像である。

天皇だけに許される黄櫨染御袍(ころろぜんのごほう)をまとい、頭には日本古来の太陽信仰を表す赤玉をつけ、さらに仏教の権威を示す袈裟をまとって手に五鈷杵(ごこしよ)と金剛鈴を持っている。

一方、冠には中国式の冕冠十二旒を戴き、皇帝専制への志向を示している。





黄櫨染御袍をまとい即位礼正殿の儀を行う天皇
2019年10月22日 皇居宮殿松の間にて

前期倭寇

〔解説〕

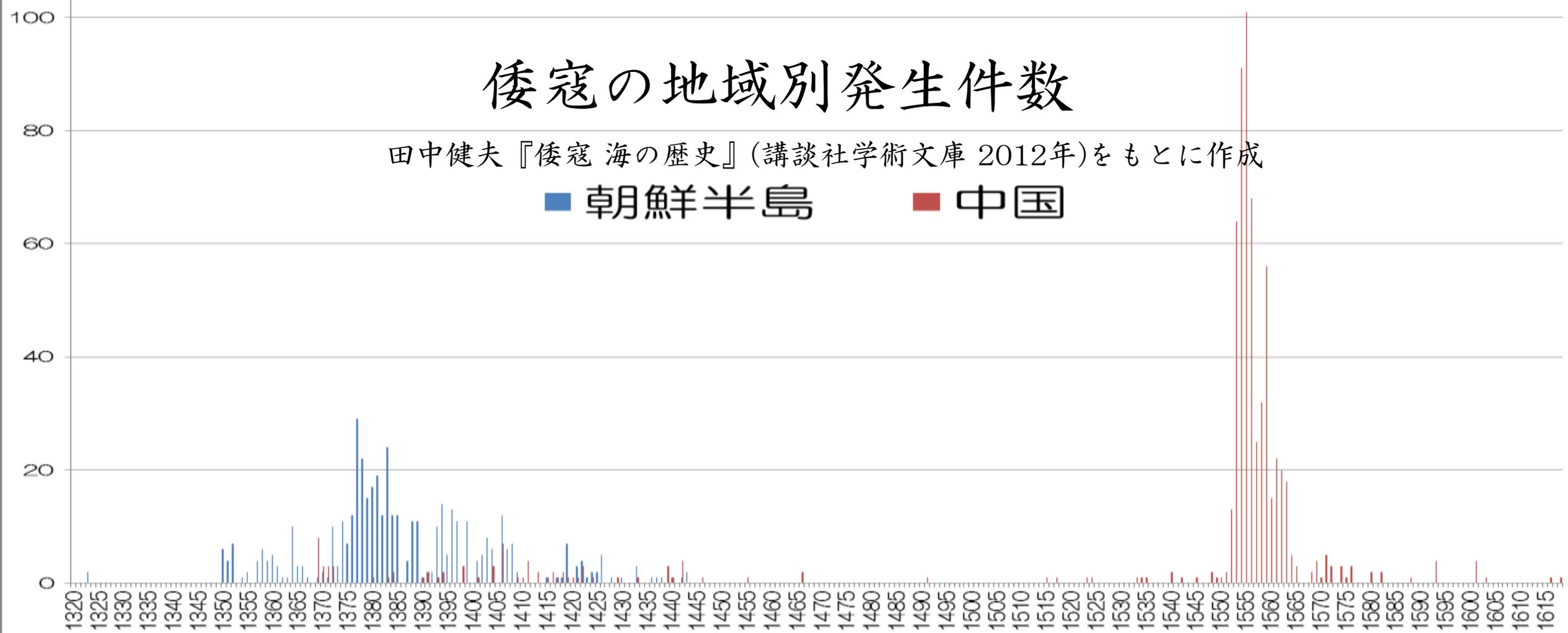
南北朝の内戦で激戦地の一つとなつた九州とその近辺の島々では、戦乱による食料不足や労働力不足が深刻であつた。

生活に窮した住民たちは、武装集団となつて、朝鮮半島や中国の沿海部を襲い、略奪や拉致を行うようになった。前期倭寇である。

倭寇の地域別発生件数

田中健夫『倭寇 海の歴史』(講談社学術文庫 2012年)をもとに作成

■ 朝鮮半島 ■ 中国



元 1271-1368年

明 1368-1644年

高麗 918-1392年

朝鮮 1392-1910

鎌倉時代

南北朝時代
1336-92年

室町時代

戦国時代
1493-1573年

安土桃山時代

江戸時代



明太祖洪武帝(1328~98)

明からの倭寇取り締まり要求

〔解説〕

日本が南北朝の内乱に明け暮れていたころ、中国では貧農の家に生まれた朱元璋が元末の反乱の中で頭角を現し、一三六八年、モンゴルを駆逐して漢民族の王朝を復興した。明である。

朱元璋は建国後ただちに日本へ使節を派遣し、元末以来、しばしば中国沿岸部を襲っていた倭寇の取締りを要求した。

北朝征夷大將軍
足利義満

南朝征西大將軍
懐良親王



明からの倭寇取り締まり要求

〔解説〕

朱元璋が派遣した使節を迎えたのは、足利幕府ではなく、南朝の征西代將軍として大宰府一帯を守っていた懐良（かねよし・かねなが）親王であった。

南北朝皇統譜

(北朝)

後伏見天皇

光嚴天皇

崇光天皇

花園天皇

光明天皇

後光嚴天皇

(南朝)

後醍醐天皇

尊良親王

世良親王

成良親王

後村上天皇

長慶天皇

護良親王

宗良親王

懷良親王

後醍醐天皇の皇子であり南朝の征西大將軍でもあった懐良親王は、朝鮮半島や中国で略奪や拉致を行う倭寇にどのような態度を取っていたか？

① 黙認していた

② 厳しく取り締まっていた



明からの倭寇取締り要求

〔解説〕

日本はモンゴルの二度にわたる遠征（元寇）を受けたことで、中国や朝鮮に強い警戒心と敵意を持っていた。このため南北朝の内戦により食料や労働力が不足すると、朝廷も幕府も倭寇が朝鮮半島や中国沿海部で略奪や拉致を行うのを黙認していた。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣

明からの倭寇取締り要求

〔解説〕

『明史』日本伝には、明朝と日本の倭寇取り締まりに関する交渉の経緯が次のように記されている。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝卽位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我

明史卷三百二十二日本伝

其僧祖來奉表稱臣

洪武二年（一三六九年）三月、洪武帝は使節として楊載を派遣して、日本に詔諭を下し、倭寇の侵入について責任を追及した。

「朝貢を望むなら宮廷に来るようにならねばならぬ。武器を調え守りを固めよ。もし倭寇を続けるのなら、將軍に命じて征伐するのみ。王よ、よく考えよ」

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣

明史卷三百二十二日本伝

日本の王・良懷*は命に従わず、再び倭寇が山東を襲い、さらに温州、台州、明州(寧波)の沿海住民を略奪し、ついには福建の沿海郡に及んだ。

*良懷とは懷良親王のこと。親王はこの時明が派遣した使節七人のうち五人を殺害し、楊載ら二名は、三ヶ月に及ぶ拘留の後釈放された。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣

明史卷三百二十二日本伝

そこで洪武三年（一三七〇年）三月、萊州府の同知趙秩を派遣して、日本の責任を追及した。

海を渡り日本の領内に入ったが、警備の者に入国を阻まれたため、懐良親王に書簡を送ると、親王は趙秩を迎え入れた。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我

明史卷三百二十二日本伝

其僧祖來奉表稱臣

懷良親王は言った。

「わが国は扶桑の東にあるが、いつも中国を敬慕してきた。ところが蒙古は我々と同じ夷狄でありながら、我々を臣従させようとし、先王がこれを不服とすると趙という姓の者を派遣し、甘言をもって欺こうとした。そして交渉も終わらぬ中に、十万の水軍が海岸に並んだ。」

元の使節・趙とは

〔解説〕

懐良親王のいう元の使節・趙とは、
趙良弼（一一一七〜八六）を指す。

女真族出身の趙良弼は、金朝とモンゴルとの戦いの中で父や兄を失い、母とともに戦火の中をさまよった。

その後、元朝に仕えた彼は、無益な戦争を避けるため、自ら志願して二度日本に渡り外交交渉を行うとともに、フビライに日本遠征をやめるよう進言した。

武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

- 1268年 1月、モンゴルの命を受けた高麗の使節団が大宰府に来訪し親書(蒙古国牒状)を渡す(第一回)
- 69年 2月、モンゴルの使節団が対馬に来訪(第二回) 9月、再び対馬に来訪し国書を渡す(第三回)
- 70年 1月、朝廷がモンゴルへの返書を作るが、幕府の反対で送付せず
- 71年 9月、趙良弼らモンゴルの使節団が筑前に来訪(第四回) 11月、国号を大元と定める
- 72年 2月、趙良弼ら使節団とともに日本の使節が高麗を經由して元の都・大都を視察
- 73年 3月、趙良弼ら元の使節団が再び大宰府に来訪 (~9月 第五回)
- 74年 10月、元の軍隊が対馬、筑前に来襲 (文永の役)
- 75年 4月、杜世忠ら元の使節団が長門室津に来訪 9月、鎌倉で斬首される(第六回)
- 76年 1月、元が南宋の都・臨安に入城、宋帝を大都へ 10月、幕府が筑前の海岸に石塁を築造
- 77年 6月、南宋に渡った日本商船が交易を止めて帰国
- 78年 11月、元が日本商船の交易を許す
- 79年 2月、元が南宋を滅ぼす 7月、周福ら元の使節団が筑紫に来訪 博多で斬首される(第七回)
- 80年 2月、朝廷が諸寺に異国降伏の祈禱を命じる
- 81年 5月、高麗軍が対馬に来襲 6月、元軍が高麗軍と合流し、志賀島、長門に来襲 (弘安の役)

(中略)

- 88年 ベトナムがバクダン(白藤)河の戦いで元軍を破る

明史卷三百二十二日本伝

「いま新たな天子が中国で帝位についたというが、使節の姓は趙であるからこれも蒙古の後裔であり、甘言によつてわれらを欺き襲撃するつもりであるう」

そして左右の者に趙秩を斬るよう目くばせした。

濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

- 1268年 1月、モンゴルの命を受けた高麗の使節団が大宰府に来訪し親書(蒙古国牒状)を渡す(第一回)
- 69年 2月、モンゴルの使節団が対馬に来訪(第二回) 9月、再び対馬に来訪し国書を渡す(第三回)
- 70年 1月、朝廷がモンゴルへの返書を作るが、幕府の反対で送付せず
- 71年 9月、趙良弼らモンゴルの使節団が筑前に来訪(第四回) 11月、国号を大元と定める
- 72年 2月、趙良弼ら使節団とともに日本の使節が高麗を経由して元の都・大都を視察
- 73年 3月、趙良弼ら元の使節団が再び大宰府に来訪 (~9月 第五回)
- 74年 10月、元の軍隊が対馬、筑前に来襲 (文永の役)
- 75年 4月、杜世忠ら元の使節団が長門室津に来訪 9月、鎌倉で斬首される(第六回)
- 76年 1月、元が南宋の都・臨安に入城、宋帝を大都へ 10月、幕府が筑前の海岸に石塁を築造
- 77年 6月、南宋に渡った日本商船が交易を止めて帰国
- 78年 11月、元が日本商船の交易を許す
- 79年 2月、元が南宋を滅ぼす 7月、周福ら元の使節団が筑紫に来訪 博多で斬首される(第七回)
- 80年 2月、朝廷が諸寺に異国降伏の祈禱を命じる
- 81年 5月、高麗軍が対馬に来襲 6月、元軍が高麗軍と合流し、志賀島、長門に来襲 (弘安の役)

(中略)

88年 ベトナムがバクダン(白藤)河の戦いで元軍を破る

明史卷三百二十二日本伝

趙秩は少しも動じることなく、
ゆつくりとこう言った。

「わが大明国の天子は、神聖にして
文武を兼ねること蒙古の比ではない。
また私も蒙古の使者の後裔ではない。
殺せるなら、殺すがよい」

范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒
後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝卽位方國
珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東
濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且
詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲
寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復
寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年
三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入
其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶
桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我
先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍
十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新
天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好
語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天
子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我
良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣
貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四
年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

明史卷三百二十二日本伝

懷良親王は驚いて堂を下ると、趙秩を手厚くもてなし、その国の僧・祖來を派遣して上表文を奉じて臣下と称し、馬や特産物を貢物として献上した。

また明州(寧波)と台州の二郡から拉致した七十余名を、洪武四年(一三七一年)十月に都へ帰還させた。

范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

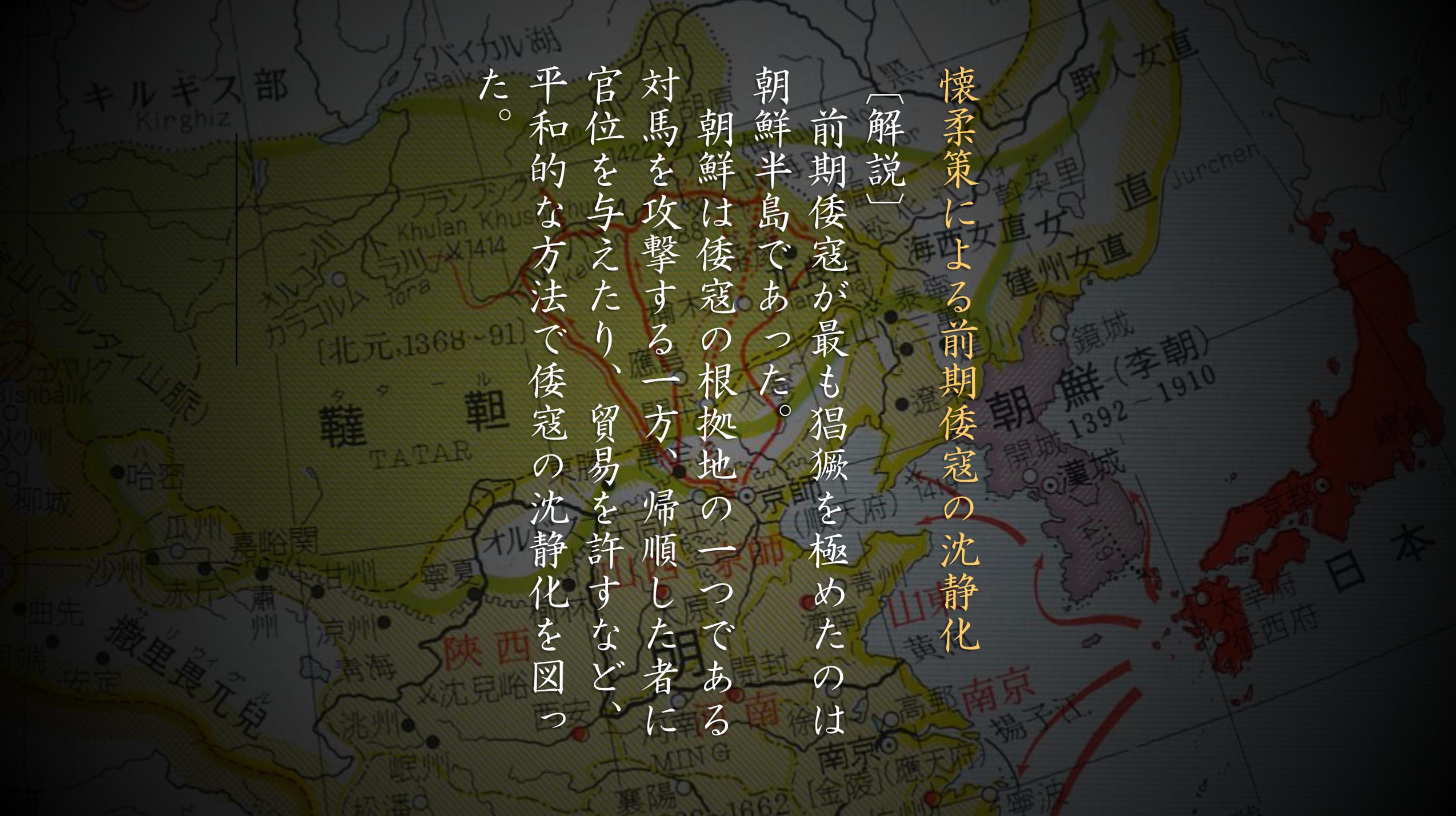
中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

懐柔策による前期倭寇の沈静化

〔解説〕

前期倭寇が最も猖獗を極めたのは朝鮮半島であった。

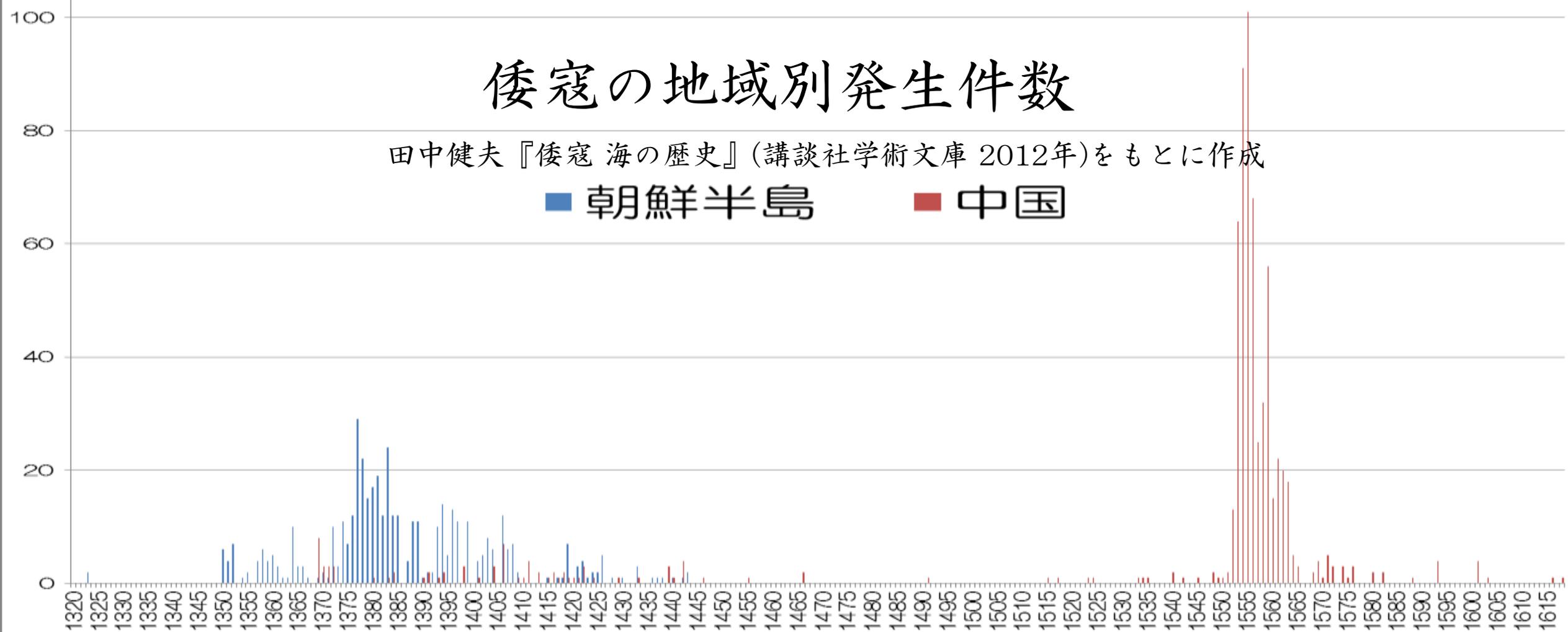
朝鮮は倭寇の根拠地の一つである。対馬を攻撃する一方、帰順した者に官位を与えたり、貿易を許すなど、平和的な方法で倭寇の沈静化を図った。



倭寇の地域別発生件数

田中健夫『倭寇 海の歴史』(講談社学術文庫 2012年)をもとに作成

■ 朝鮮半島 ■ 中国



元 1271-1368年

明 1368-1644年

高麗 918-1392年

朝鮮 1392-1910

鎌倉時代

南北朝時代
1336-92年

室町時代

戦国時代
1493-1573年

安土桃山時代



NHK E



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年第7集」より



第二節 遣明使の時代

遣明使の派遣

〔解説〕

一三九二年、室町幕府の第三代将軍・足利義満は南北朝の合一を実現し、六十年近く続いた内戦の時代に終止符を打った。

義満は中国大陆との貿易を再開するため、倭寇の取り締まりを強化し、一四〇一年、明に使節を派遣した。明の建文帝は義満を日本国王に冊封し、遣唐使の廃止以来五百年ぶりに使節の派遣による交流と貿易が再開した。遣明使である。

足利義満(1358~1408)



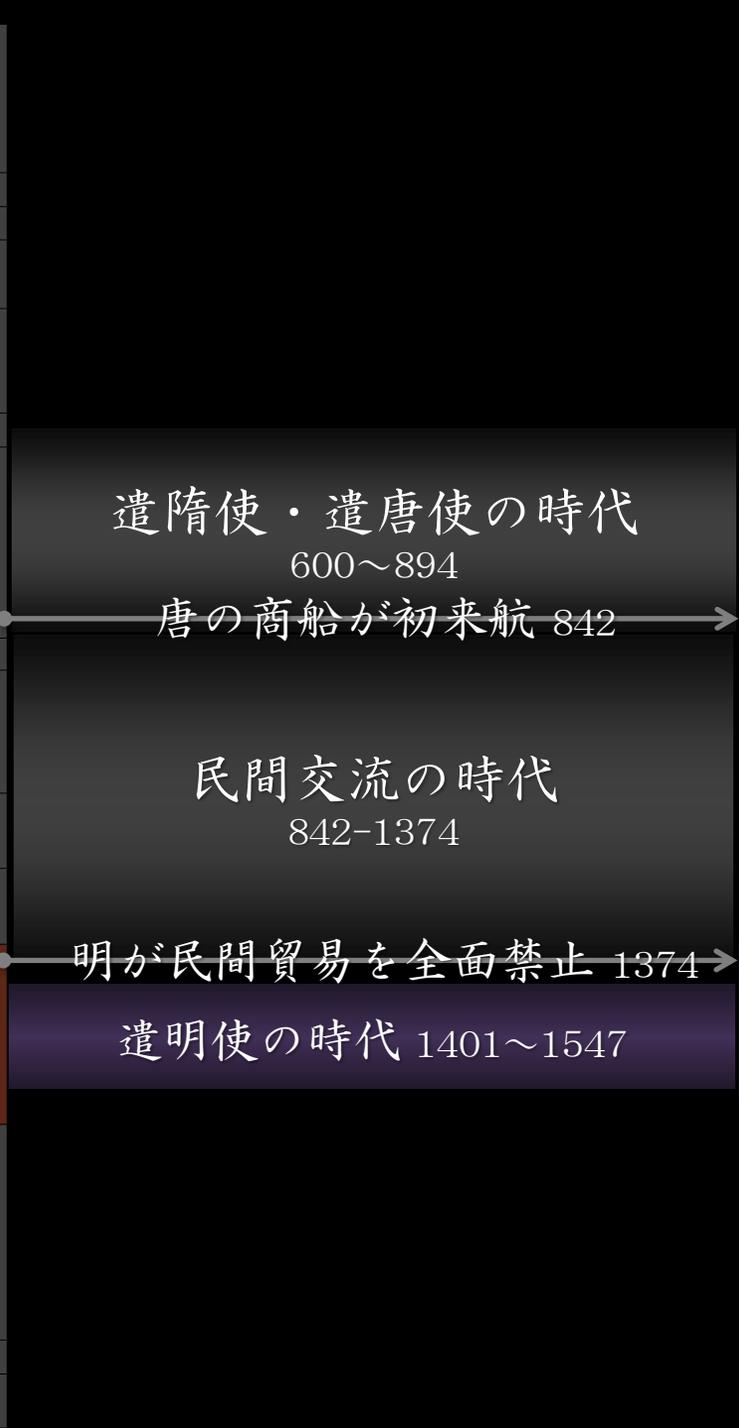
遣明船は一四〇一年から一五四七年の約一五〇年の間に、計何回派遣されたか？

② 約二十回

① 約十回



足利義満(1358~1408)





遣明使の派遣は、中世における日中間の文化交流にも寄与した。

この人物は一四六七年、遣明船に同乗して明に渡り、絵画を学んで帰国し、室町時代の水墨画を大成した画僧である。この人物は誰か？

①雪舟

②一休



雪舟(一四二〇～一五〇六年頃)

〔解説〕

雪舟は室町時代に日本の水墨画を大成した画僧。

少年時代、京都の相国寺に入り、僧侶となる。

一四六七年(応仁元年)、四十七歳の時、遣明船に同乗して明に渡る。

天童山景德寺で禅班第一座に任ぜられた後、北京に上って歴代の名画を模写するとともに、宮廷画家の李在らに中国絵画の技法を学んだ。



雪舟(1420～1506頃)



NHK ETV特集「中国でよみがえる雪舟」より



(明)李在「山水图」

この二幅の絵は、一方が雪舟の描いたもの、もう一方が雪舟に中国絵画の技法を伝えた明の宮廷画家・李在が描いたものである。どちらが雪舟の描いたものか？



(日本)雪舟「四季山水图」

雪舟「四季山水図」四幅

この絵には「日本禅人等楊」（等楊は雪舟の諱）の落款と「光澤王府珍玩之章」の所蔵印があり、雪舟が中国に留学中（一四六七〜六九年）に描き、明の光澤王府に所蔵されていたことがわかる。

帰国後に描いた雪舟様式とは異なり、留学中に師事した李在の画風に酷似している。





雪舟(1420~1506頃)

日者之禪(雪舟)



雪舟「四季山水図」

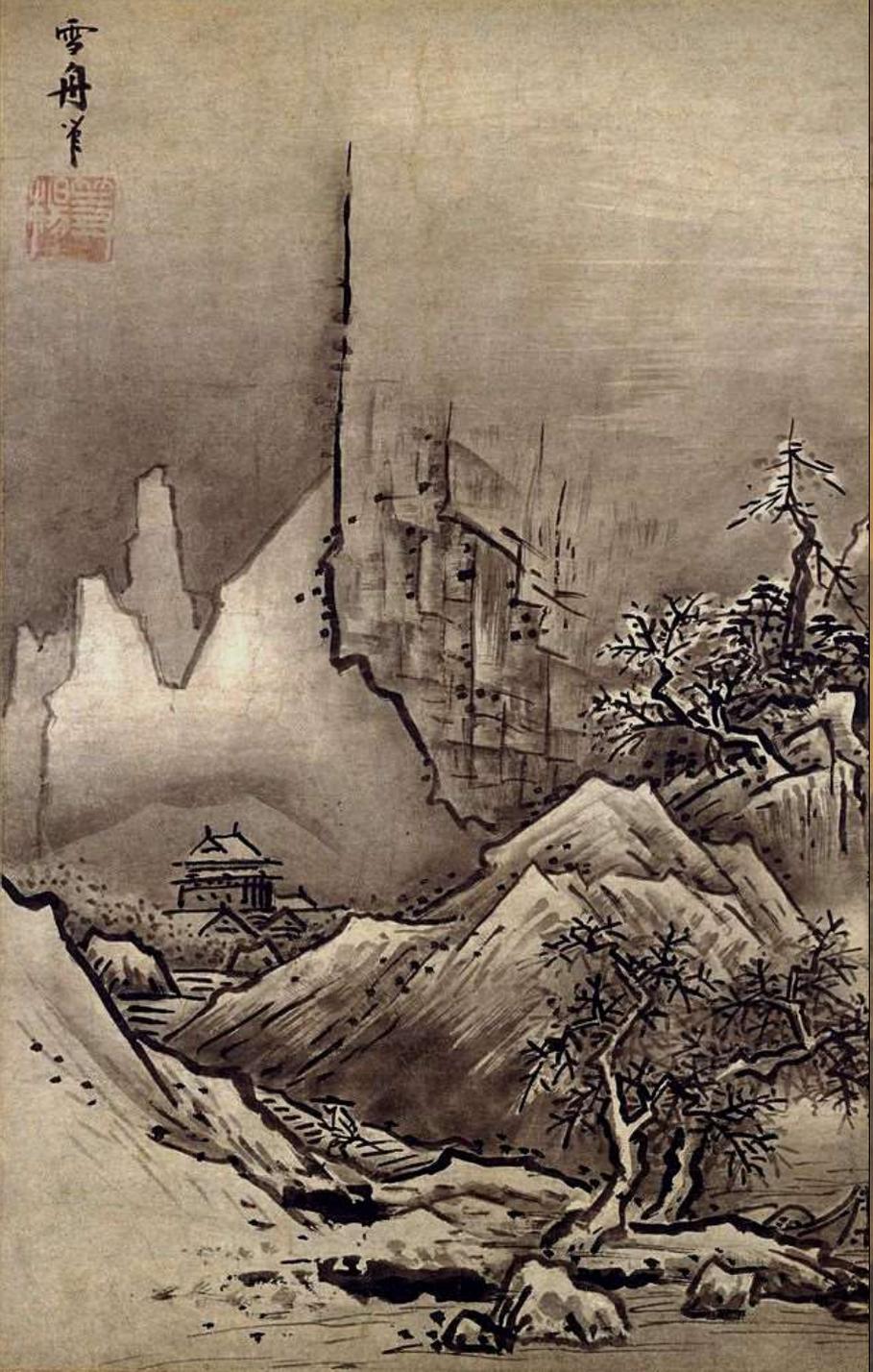
雪舟の師・李在が描いた「山水図」



雪舟が留学中に描いた「四季山水図」

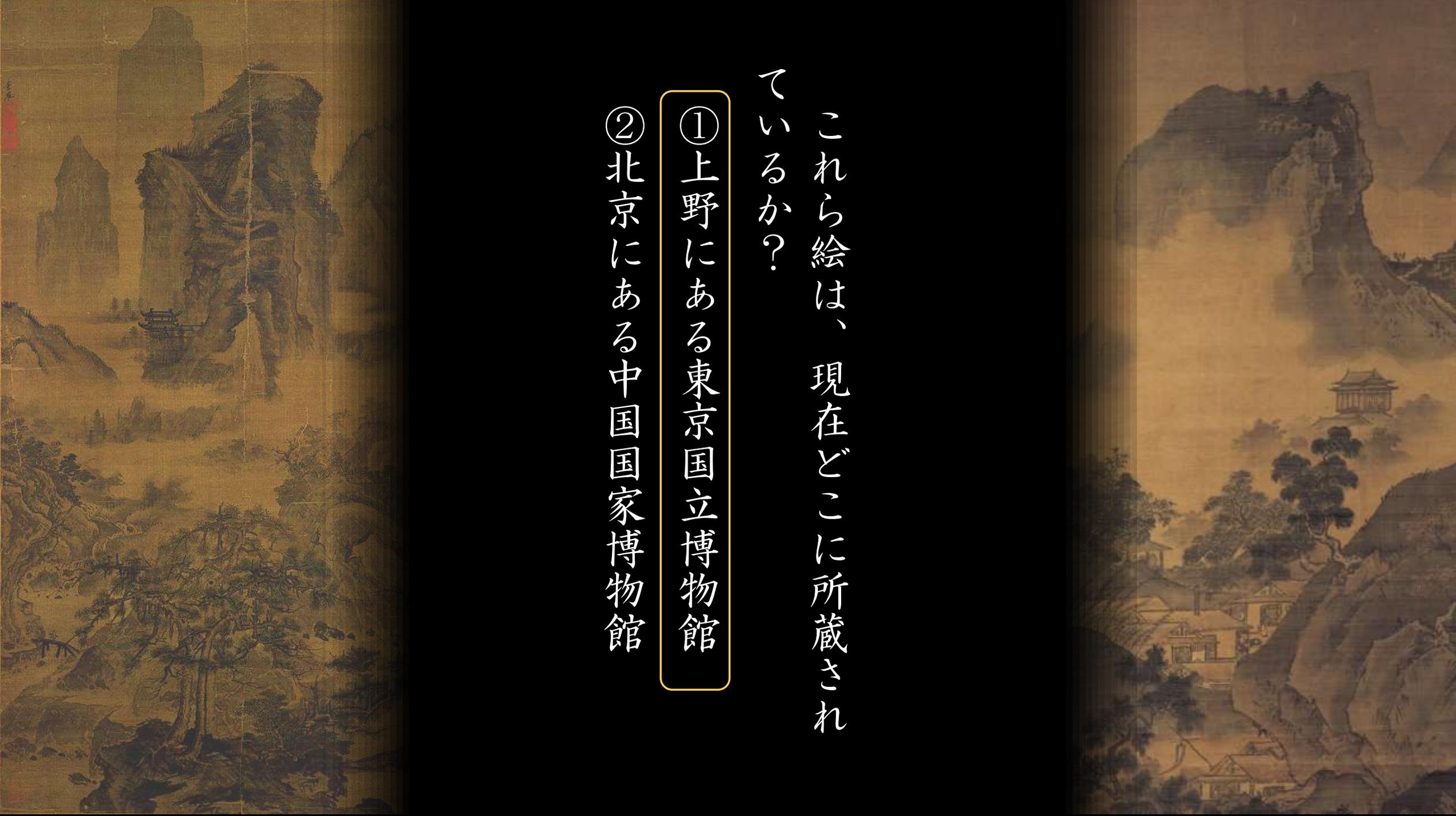


雪舟が帰国後に描いた国宝「秋冬山水図」



雪舟が留学中に描いた「四季山水図」





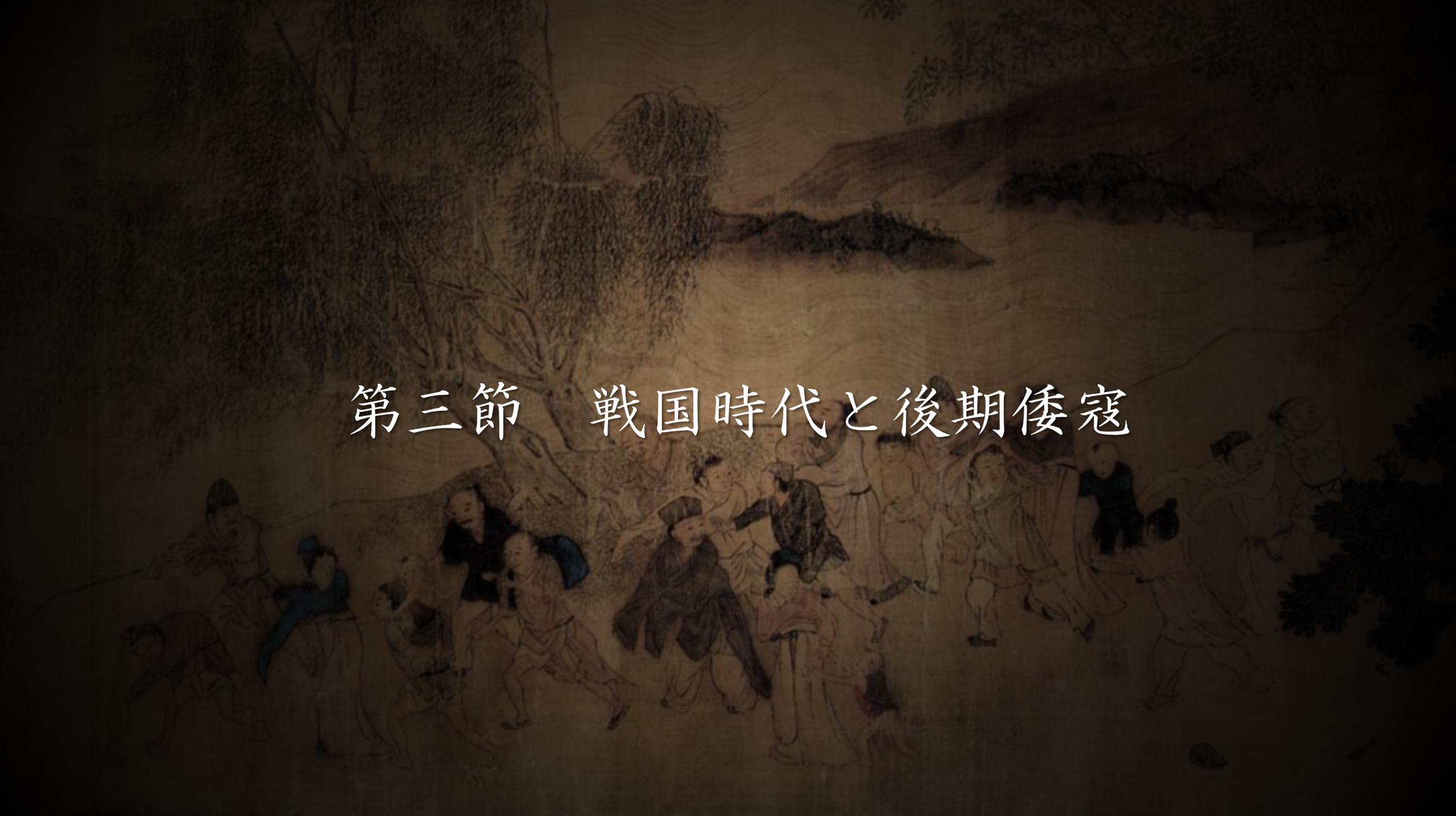
これら絵は、現在どこに所蔵されているか？

① 上野にある東京国立博物館

② 北京にある中国国家博物館



東京国立博物館

The background is a traditional Chinese ink wash painting. It depicts a landscape with a prominent mountain peak in the center, rendered with fine, textured brushstrokes. In the foreground, a group of approximately ten people, including men, women, and children, are shown in various poses, some appearing to be in conversation or a group activity. The overall style is characteristic of classical Chinese ink painting, with a focus on line work and subtle shading. The text is overlaid in the center of the image.

第三節 戦国時代と後期倭寇

後期倭寇

〔解説〕

一四六七年の応仁の乱以降、室町幕府の権威は失墜し、やがて日本はふたたび内戦の時代を迎える。戦国時代である。

遣明船の派遣はその後も続いていったが、日明間の密貿易の拡大により、一五四七年を最後に終焉を迎えた。

この翌年、明は密貿易の拠点であった双嶼を討伐するが、密貿易商人・王直らは日本の五島列島に本拠を移し、新たに多国籍の「倭寇」が中国沿岸部を襲うようになった。

倭寇の地域別発生件数

田中健夫『倭寇 海の歴史』(講談社学術文庫 2012年)をもとに作成

■ 朝鮮半島 ■ 中国



遣明船の派遣 1401-1547年

元 1271-1368年

明 1368-1644年

高麗 918-1392年

朝鮮 1392-1910

鎌倉時代

南北朝時代
1336-92年

室町時代

戦国時代
1493-1573年

安土桃山時代

江戸時代

王直（?〜一五五九）

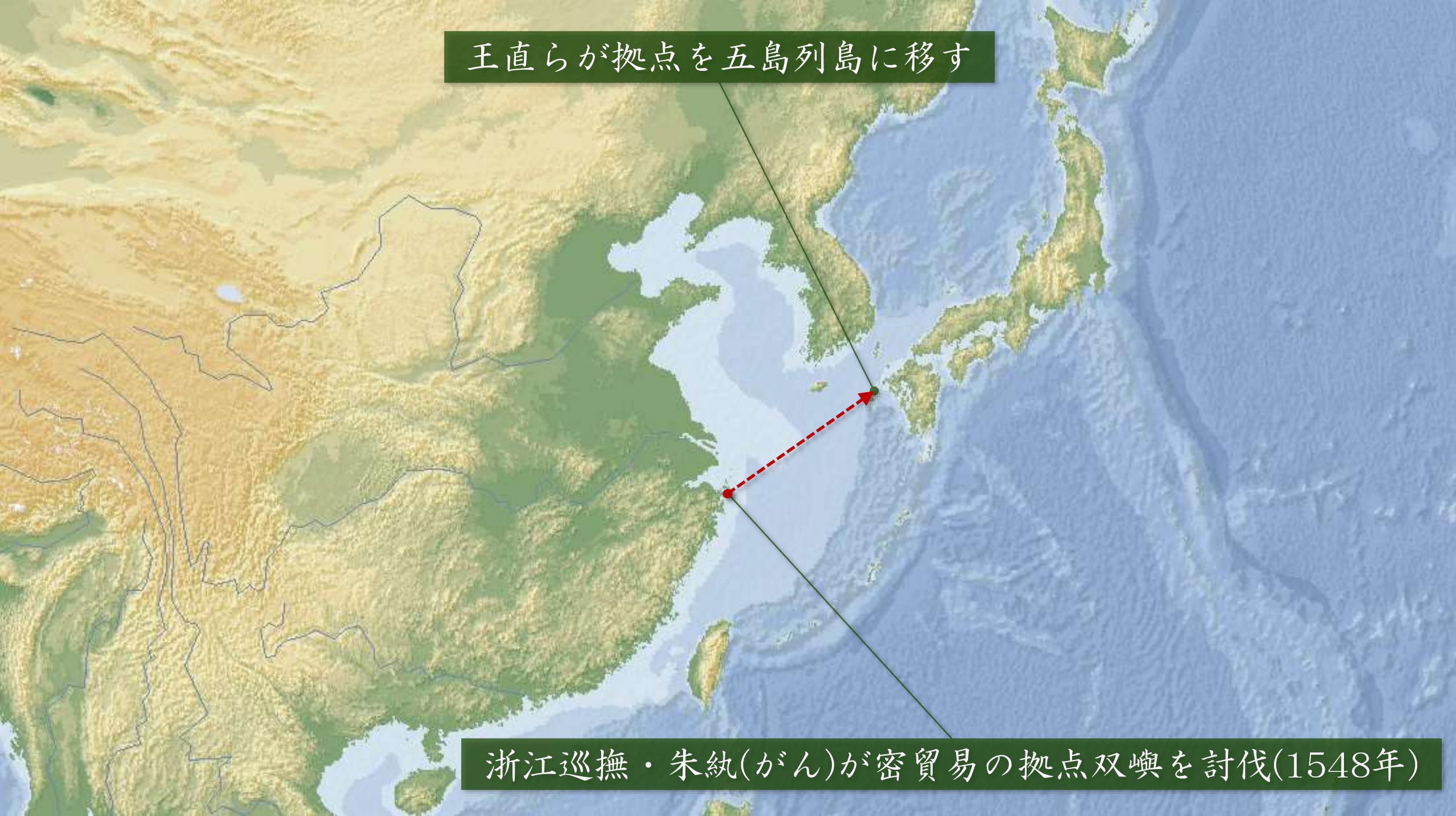
〔解説〕

王直、号は五峰。明朝政府の海禁政策を犯して国際的な海上交易を行っていたが、一五四八年、浙江巡撫・朱紘（がん）の討伐を受け、本拠地を日本の五島列島へ移した。

その後、平戸に居を構え、徽王と号して倭寇を指揮したが、五七年、征倭総督胡宗憲の策略によって捕えられ、その二年後、処刑された。



平戸に立つ王直像



王直らが拠点を一島列島に移す

浙江巡撫・朱紘(がん)が密貿易の拠点双嶼を討伐(1548年)

王直は日本の歴史に大きな影響を
与えるある事件に関わっている。そ
の事件とは？

①キリスト教の伝来

②種子島への鉄砲伝来



隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其

神皇正統記

五

語不通見者以爲奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也抔飲而不挾其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津

〔鐵炮記〕（『南浦文集』上卷所収）

〔解説〕

種子島の領主種子島時堯（ときたか）が、一五四三年に漂着したヨーロッパ人から鉄炮を購入し、その製造法や火薬の調合法を学んだ経緯を記した記録。同船に王直が同乗していたことが記されている。

薩摩の禅僧南浦文之（なんぽぶんし）が時堯の子久時の依頼により一六〇六年に著した。

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船容百餘人其形不類其

諸不通見者以爲奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也挾飲而不挾其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津津名赤尾木我所由賴之宗子世々所居之地也津

「鉄炮記」(『南浦文集』上卷所収)

天文十二年(一五四三年)、(種子島の)西村の小浦に大きな船がいた。この国から来たのかわからない。乗員は百余名で、その姿形は異様であり、言葉も通じず、見た者はみな奇妙に感じた。

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其

語不通見者以爲奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也挾飲而不挾其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津

「鐵炮記」(『南浦文集』上卷所収)

その中に明国の儒生が一人いた。

名は五峯(王直の号)、姓や字は不詳。村長の織部丞は漢文ができたので、砂の上に杖で字を書いて尋ねた。

「彼らはどこの国の人か、なぜ姿形が異なるのか」

すると五峯はこう書いて答えた。

「これは西の南蛮人の商人です」

多国籍の密貿易商人が暮らす双嶼

〔解説〕

王直ら密貿易商人が根拠地としていた双嶼には、ポルトガル人など多くの外国人が暮らしていた。ポルトガル人のフェルナン・メンデス・ピント(Fernão Mendes Pinto (?-1583))が、貿易商人としてアジア各地を訪ねた際の見聞を記した『東洋遍歴記』(一六一四年刊)*には、一五四〇年頃の双嶼のようすが描かれている。

*岡村多希子訳『東洋遍歴記 1〜3』

東洋文庫、一九八〇年



国際的密貿易集団が拠点とした双嶼

A portrait of Fernão Mendes Pinto, a Portuguese explorer and writer. He is depicted with a full beard and mustache, wearing a dark, patterned garment. The background is dark and textured.

メンデス・ピント 『東洋遍歴記』

第二二一章

この町(リャンポー双嶼)には三千人いて、うち千二百人がポルトガル人、残りはさまざまな国のキリスト教徒であった。

この町には、往来する定期船に乗船して来る私人のほか、そこに定住する司令官がいた。

病院二つと慈善院があり、それに毎年三万クルザド*以上が費やされていた。

*クルザド(Cruzado)はポルトガルの通貨単位。クルザドはおよそ金三・五グラム。三万クルザドは、金約十萬キロ。現在の価値では約七億円に当たる。

0	後漢 206BC~220AD	
100		
200	魏 220~265	蜀 221~263
250	吳 222~280	
300	晋 265-316	
350	五胡十六国時代	東晋 317-420
400		
450	北朝 439-589	南朝 420-589
500		
550	隋 581-619	
600		
650	唐 618-907	
700		
750	遣隋使・遣唐使の時代 600~894	
800	唐の商船が来航 842	
850		
900	五代十国 907-960	
950	遼	北宋 960-1127
1000		
1050	金 1115-1234	南宋 1127-1279
1100		
1150	元 1271-1368	
1200		
1250	倭寇(前期)	
1300	遣明使の時代	
1350	倭寇(後期)	
1400	明 1368-1644	
1450		
1500		
1550		
1600	清 1616-1912	
1650		
1700		
1750		
1800		
1850		
1900	中華民國 1912-1949	
1950		
2000	中華人民共和國 1949-	



0	弥生時代 紀元前?世紀~3世紀	
100		
200		
300		
400		
450	古墳時代 4世紀末~?	
500		
550		
600		
650	飛鳥時代 6世紀末~710	
700		
750	奈良時代 710~794	
800		
850		
900		
950	平安時代 794~1192	
1000		
1050		
1100		
1150		
1200	鎌倉時代 1192~1333	
1250		
1300		
1350	室町時代 1336~1573	南北朝時代
1400		
1450	戦国時代	
1500		
1550	安土桃山時代 1573~1603	
1600		
1650	江戸時代 1603~1868	
1700		
1750		
1800		
1850		
1900	近代 1868~1945	
1950		
2000	現代 1945~現在	

倭寇を描いた二種の絵巻者

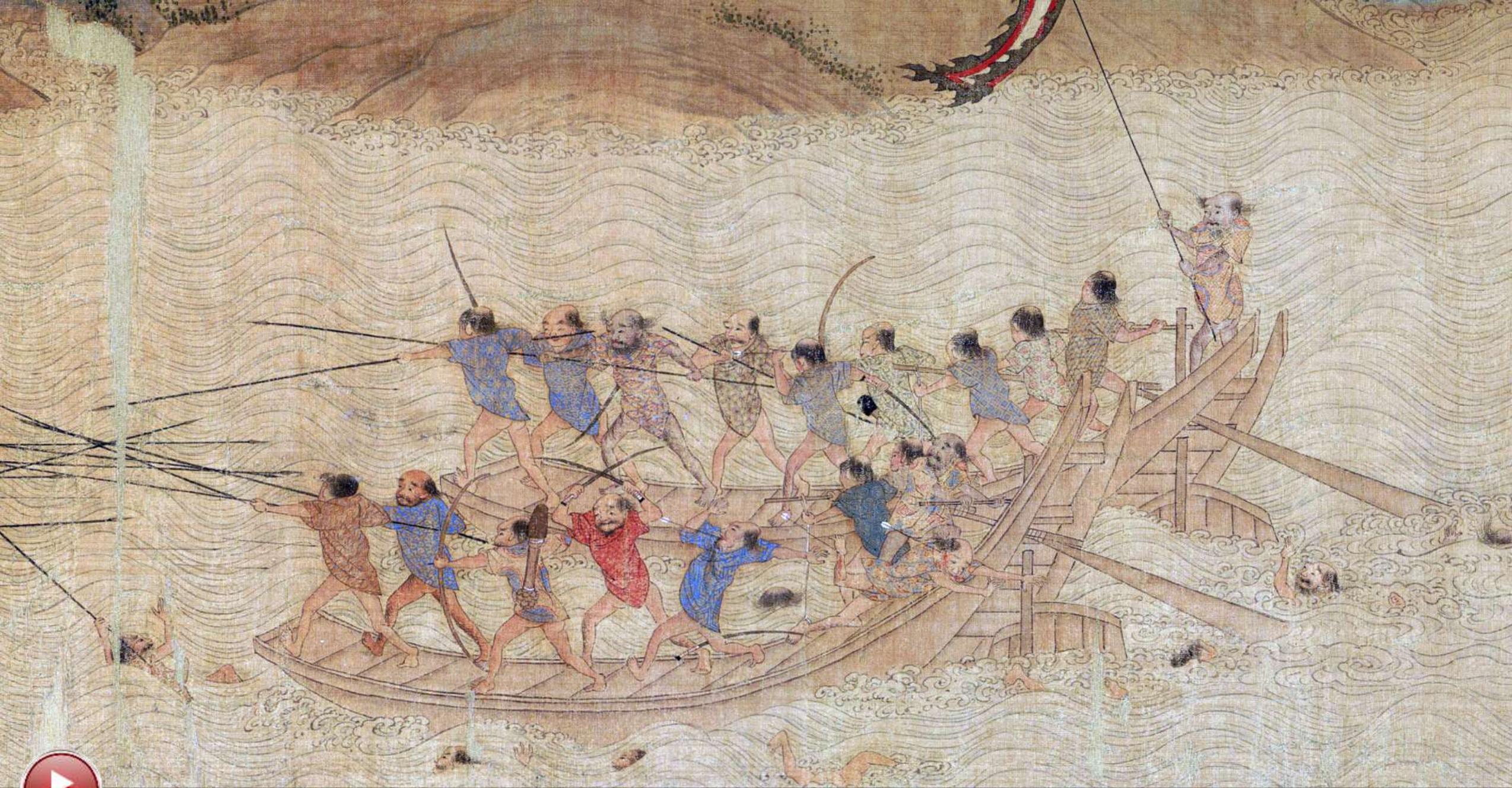
後期倭寇を描いた二種の絵巻物がある。

①中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』
(絹本着色、縦三一センチ、全長五七〇センチ、図中に「日本弘治一年」(一五五五年)と「日本弘治三年」(一五五七年)の文字がある)

②東京大学史料編纂所蔵の『倭寇図巻』(絹本着色、縦三一センチ、全長五七三センチ、図中に「日本弘治四年」(一五五八年)の文字がある)

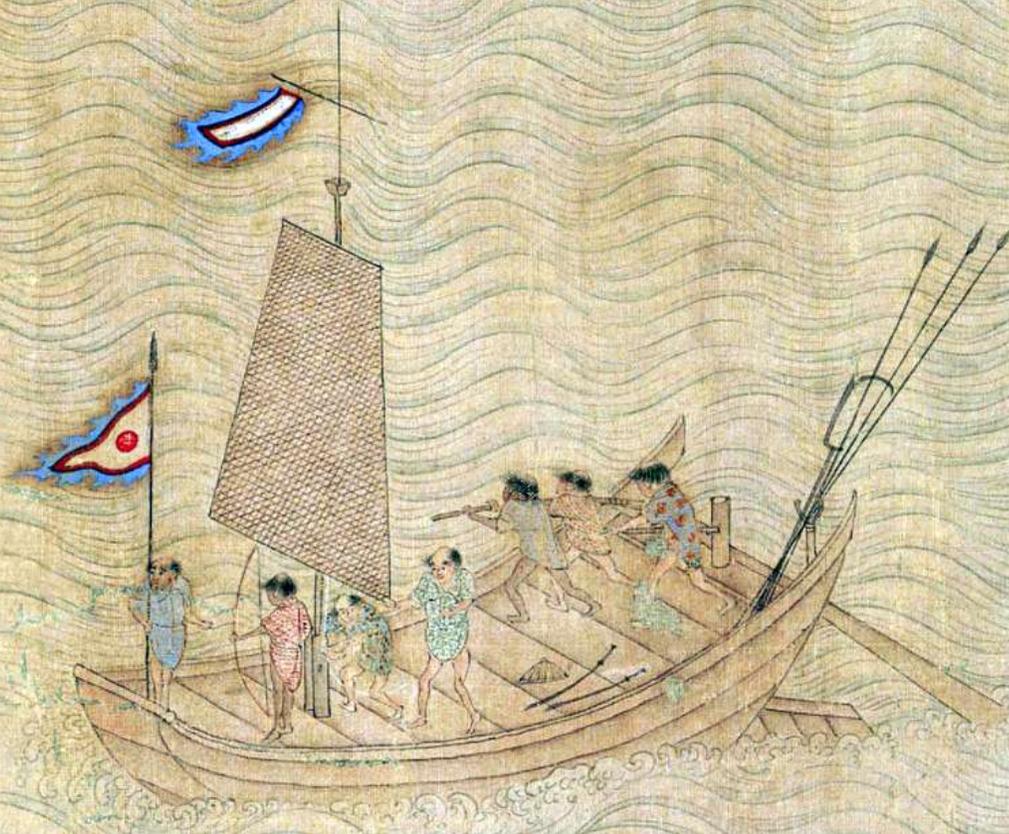


抗倭凶卷(中国国家博物館藏)



倭寇凶卷(東京大学史料編纂所藏)

倭寇の襲来



倭寇図卷(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇船



月代(さかやき)と日本刀



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇の上陸



放火と略奪



逃げ惑う民衆



官軍が倭寇退治に出発



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇を迎え撃つ官軍の軍船



倭寇と戦う官軍の軍船



“捷報”（勝利の知らせ）を伝える伝令



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇の拉致事件

〔解説〕

倭寇は密貿易を行ったり、金品を略奪しただけでなく、労働力となる人も拉致した。

異国へと連れ去られた人々の悲劇は文学作品の素材ともなり、中国では小説「楊八老越国奇逢」、日本では謡曲「唐船」などの作品が作られた。

楊八老越国奇逢

君不見平陽公主馬前奴、一朝富貴嫁爲夫、又不見咸陽東門種瓜者、昔日封侯何在也、榮枯貴賤如轉丸、風雲變幻誠多端、達人知命揔度外、傀儡場中一例看。

這篇古風是說人窮通有命或先富後貧先賤後貴如雲蹤無定瞬息改觀不由人意思測度且如宋朝呂蒙正秀才未遇之時家道艱難三日不曾飽餐天津橋上拾得一瓜在橋柱上磕之入手落于橋下那

倭寇の拉致事件を描いた明代の小説

「楊八老越国奇逢」

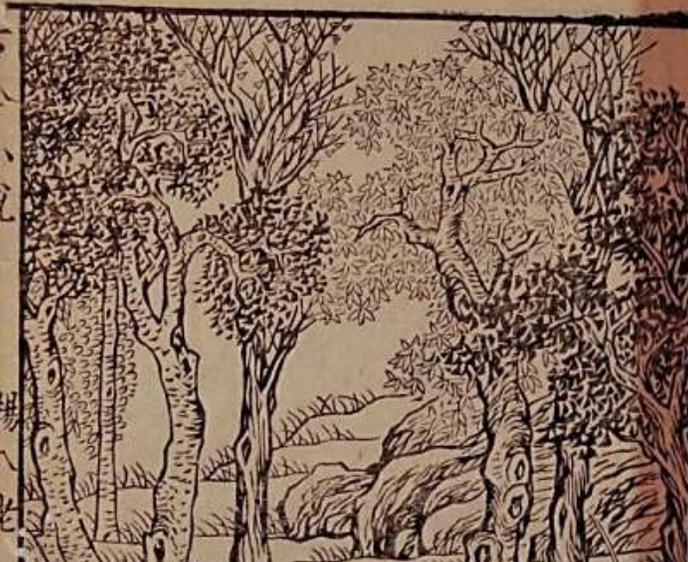
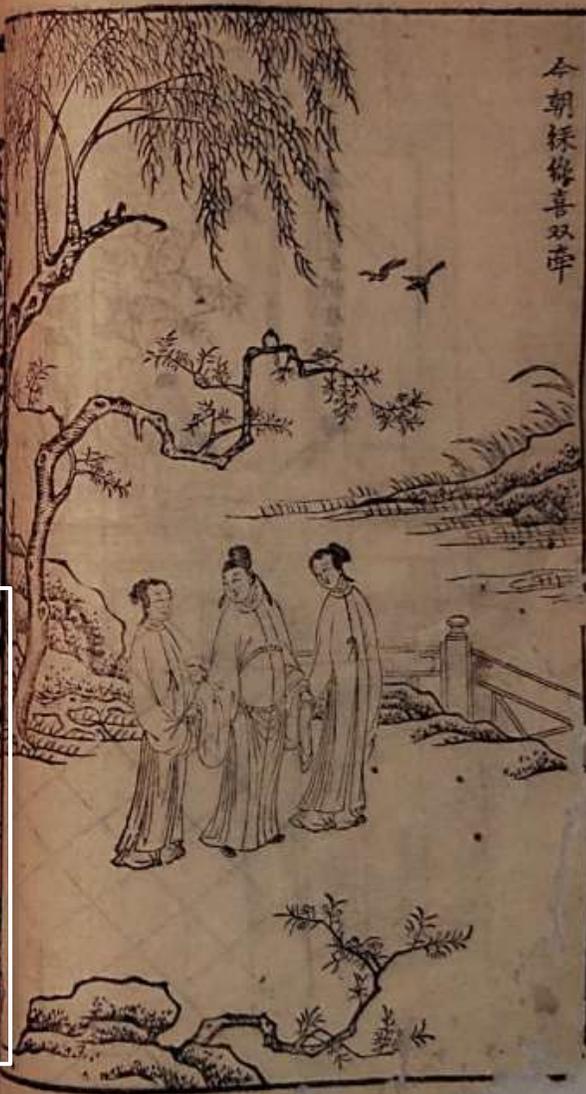
(古今小説卷十五所収)

陝西の商人・楊八老には李氏という妻と世道という子がいた。商いのため福建に行った楊八老は、そこで槩(はく)氏を妻に迎え、世徳という子が生まれる。

陝西に帰る途中、楊八老は倭寇によって異国に連れ去られてしまう。それから十九年後、倭寇とともに中国に戻った楊八老は、役人に捕えられ、裁判にかけられる。

昔の下僕の証言で、楊八老は紹興府へ送られるが、そこで役人となっていたのは、十九年前に別れた二人の子供たちであった。

こうして物語は大団円で終わる。



第十八卷

楊八老越國奇逢

君不見平陽公主馬前奴，一朝富貴嫁爲夫。又不見咸陽東門種瓜者，昔日封侯何在也。榮枯貴賤如轉丸，風雲變幻誠多端。達人知命揔度外，傀儡場中一例看。

這篇古風是說人窮通有命，或先富後貧，先賤後貴，如雲蹤無定，瞬息改觀，不由人意思測度。且如宋朝呂蒙正秀才未遇之時，家道艱難，三日不曾飽餐。天津橋上賒得一瓜，在橋柱上磕之，失手落于橋下，那

楊八老越國奇逢 (古今小說第十八卷 法政大學圖書館藏)

楊八老漳州
被虜



楊八老越國奇逢(古今小說第十八卷所收 法政大學圖書館藏)

日本の能に描かれた明の被虜人

謡曲「唐船」

祖慶官人は寧波近くで倭寇に捕えられ、筑前の箱崎殿のもとで十三年間使役される。日本の妻を娶り二人の子供がいたが、ある日、中国に残してきた二人の子供が父を迎えに来る。中国へ帰国するには日本の子供たちと別れねばならない。祖慶官人は苦悩するが、箱崎殿の計らいで日本の子供とともに帰国することが許される。



まとめ

南北朝の争乱に始まった室町時代。朝廷や幕府が海上の武装集団による密貿易や略奪行為を黙認したことで、東アジアの人々の対日イメージは大きく悪化する(前期倭寇)。

一三六八年、モンゴルを駆逐し、漢民族の王朝を復興した明は、倭寇を防ぐため民間貿易を禁じ、朝貢貿易への一本化を進めた。南北朝の争乱に終止符を打った室町幕府は、一四〇一年、使節を派遣し、明の朝貢貿易体制の中に加わった(遣明使)。

しかし、室町幕府の力が衰え、戦国時代を迎えると、多国籍の武装集団が日本を拠点に大規模な密貿易と略奪行為を再開し、残虐非道という対日イメージがさらに広がっていった(後期倭寇)。

参考文献

- 田中健夫『倭寇海の歴史』（講談社学術文庫二〇一二年）
- 蓮実重康『雪舟等揚論とその人間像と作品』（筑摩書房一九六一年）
- 朱敏『『明人抗倭図巻』を解読する』『倭寇図巻』との関連をかねて』（東京大学史料編纂所研究紀要第二二号二〇一二年三月）
- 東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇 「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』（吉川弘文館二〇一四年）